

本論は、現象学と自然主義の違いを存在論の対立として描き、その上で自然主義を擁護することを目的としている。現象学と自然主義の対立はおそらく、存在論の違いだけに存するのではない。現象学を好む精神は繊細の精神であり、自然主義を好む精神は幾何学的精神であるというような違いも存在していると、私は考えている。それでも両者の対立に存在論という観点からアプローチするのは、両者の差異が両者の存在論の差異において最も際立つと考えたからに他ならない。

1節では、存在論とはいかなるものであるかを確認し、言葉の用法が混乱している状況を指摘した上で、これまでどのような存在論が提起されてきたかを紹介する。2節では、複数の存在論が林立する時に、それらがどのように評価され、優劣を付けられるかについて考察したい。この考察によって、自然主義的存在論と現象学的存在論の決定的な違いが浮き彫りになることが期待されている。3節では、1節と2節での予備的考察を踏まえた上で、自然主義的存在論がどのような動機に基づいているかを論じたい。

1. 存在論とは何か？

存在論的〔ontological〕な問いとは、何かが存在するとはいかなることであるかを問うことである。存在論的な問いは、何が存在するかという問い——ここでは存在的な〔ontic〕な問いと呼ぶことにする——とは区別されなければならない。もちろん、存在論的な問いへの解答は、存在的な問いへの解答と連動している。存在論が変化すれば、今まで存在者と認められていたものがもはや存在者とは認められなくなったり、その逆のことが起こったりする。存在論的な問いは、「存在する」という述語の内包を問うものであり、存在的な問いは、「存在する」という述語の外延を問うものである。おそらくハイデガーが唱える存在論的／存在的の差異には、それとは別の意味合いがあるのだろうが、ここではその点は無視したい。

分析哲学の文脈では、実は、「存在論的」〔ontological〕という語は、ここで言う「存在的」の意味で使われている。このことが、分析哲学の研究者と現象学の研究者の間のコミュニケーションを障害している一因になっていることは想像に難くない。たとえば、分析哲学の大家クワインは、何が存在するかは共同体が採用する言語によって変化すると主張した。そしてクワインはこのテーゼに対して、「存在論的相対性」〔ontological relativity〕という名称を与えたのである。しかし本論での存在論的／存在的の区別を前提にするなら、これは「存在的相対性」〔ontic relativity〕と呼ぶべきであった。そしてクワインの存在的相対性は、彼独特の存在論に根ざしているのである。クワインの存在論は、論理学的存在論とでも呼ぶべきであろう。それは、「存在するとは、量化〔quantification〕の作用域に入ることである」というものである。ここで量化詞〔quantifier〕とは、「すべての」とか「ある」のことであり、要するにそれは、「すべてのもの」と私たちが言ったときに、そこに含まれるものが、そしてそれだけが存在するのだと考える存在論である。

用語の混乱はそれだけではない。自然主義や分析哲学の研究者の間では、「認識論的には」／「存在論的には」という一対の表現が頻繁に用いられる。「認識論的には」とは、「存在する対象にいかんして認識が到達するかということの問題にすると」という意味であり、「存在論的には」とは、「そのような認識にどうやって至るかは差し置くとして、何が存在するのかが問題にすると」という意味である。ここでもやはり、「存在論的には」、は「存在的には」と言い換えるべきである。

さて、哲学界ではこれまでに、様々な存在論が提出されてきた。先ほど挙げたクワインの存在論も含めて、私が知る範囲内では以下のようなものがある。

論理学的存在論：存在するとは、量化の作用域に入ることである。

観念論的存在論：存在するとは、知覚されるということである。

現象学的存在論：存在するとは、意識に現れる（体験される）ということである。

自然主義的存在論：存在するとは、時空間に位置し、物理法則に従うということである。

現象学的存在論や自然主義的存在論は、数ある存在論的立場の中の一つにすぎないのである。

2. 存在論の間いかに優劣をつけるか？

存在論が「存在する」という述語の内包に関わるのだとすると、ある存在論が妥当であるかは、私たちが存在すると認める存在者をその存在論が存在すると正しく認められるかどうかによって検証可能ではないだろうか？しかし、このような検証方法には二つの疑問が直ちに沸いてくる。第一の疑問は、このような検証方法では、現象学的存在論に対する反例が出てくるはずはないのではないかというものである。それはそうだ。「これこれの存在は反例ではないか？」とある存在者を例に挙げた瞬間に、反例になるはずの存在者が意識に現れ、もはや「存在するとは意識に現れるということである」という存在論の反例にはならなくなってしまふからである。そして第二の疑問は、これでは自然主義的存在論は端的に誤っていることになってしまうのではないか、というものである。例えば数は、あるいは規範性は、可能性は、理念は、目的は、意味は、概念は、意識は、クオリアは、志向性は、時空間に位置し物理法則に従う何ものかなのだろうか？到底そうは思えない、というわけである。このような存在者が現に存在するにもかかわらず、自然主義的存在論がそれらを存在者として認めないのであれば、それはすなわち自然主義的存在論が誤っていることを帰結するということになるのではないだろうか。

この二つの疑問は、現象学的存在論と自然主義的存在論の間の重要な質的差異を指し示している。その差異とは、ストローソンが記述的形而上学〔descriptive metaphysics〕と改訂的形而上学〔revisionary metaphysics〕と呼び分けた、二つの形而上学的態度の違いに一致している。ストローソンによれば、記述的形而上学とは、世界について我々が現にどのように考えているか、その構造を記述することで満足する形而上学であり、改訂的形而上学とは、世界についての我々の考え方の構造を改良することを目指す形而上学である。存在論は形而上学の花形であるが、この区別を用いれば、現象学的存在論、及びおそらく論理学的存在論は記述的形而上学に分類されるのに対し、自然主義的存在論と観念論的存在論は、改訂的形而上学に属していることになる。

記述的形而上学は、私達の考え方の現実の姿に寄り添うことを目指しており、改訂的形而上学は、私達の考え方のあるべき姿を提示しようとしているわけだから、現に私たちが存在すると考える存在者を正しく存在者と認めることができているか、という基準で比較すれば、現象学的形而上学に軍配が上がるのは当然である。だが自然主義者は、そもそもこのようなテスト方法には納得しないのだ。存在するとは知覚されるということである、と主張する観念論者を想像してほしい。彼に対して、「いやいや、知覚されていないもの、例えば扉の奥の部屋だって現に存在しているじゃないですか！」と反論したところで、それだけでは効き目がないことは

明らかである。というのも、観念論者が主張しているのは、まさにこのような素朴実在論的な考え方を改めるべきだということだからである。この点では、自然主義者も観念論者と同じである。自然主義者が目指しているのは、何が存在するかに関する私達の現在の直観を疑い、それを改良することなのである。

自然主義者は、「○○は現に存在するのに、自然主義的存在論がそれを存在者と認めないのはおかしいじゃないか！」という反論に対して、二通りの方法で対処する。懐柔するか、抹殺するかである。

反論の懐柔は、「還元」〔reduction〕と呼ばれている。還元とは、一見すると自然主義的存在論の反例になりそうな存在者が、自然主義的存在論が存在を認める存在者と同一であると主張することである。成功した還元例は、科学の中に数多く見出せる。例えば、熱は分子の運動だと考えられており、熱素というそれ自体独特の存在者が存在するのだとは考えられていない。熱の存在は分子運動の存在に還元されたわけである。同様に、石鹼の汚れを落とす力の存在は、石鹼の分子が親水基と疎水基を併せ持つことに還元される。また生物の遺伝現象は、DNAの半保存的複製に還元される。

他方、反論の抹殺は、「消去」〔elimination〕と呼ばれている。消去とは、自然主義的存在論が流布した暁には、問題となる存在者はそもそも存在しなかったということになるだろう、ということ論証するものである。このような言い逃れが可能である点こそ、改訂的形而上学の特権である。かつて存在するとされていたものが、のちにそもそも存在しなかったとみなされるようになるということは、歴史上しばしば存在したことである。例えば呪いや動物精気、フロギストンやエーテルがそれである。呪いであるような存在者や、動物精気であるような存在者は、現在ではそもそも存在しなかったと考えられている。もちろん、このように語ることができるのは、呪いの概念や動物精気概念が、現在でもまだ存続しているからである。

このように自然主義的存在論は、反例であるかに見える存在者を時には還元し時には消去することで、適用領域を拡大し、最終的には世界のすべての事象を時空間に位置し物理法則に服する存在者のみを用いて説明し尽くすことを目指す、一大プロジェクトを形成する。自然主義が目論む存在論の改訂は、この一大プロジェクトが完成した暁にはじめて達成されるのである。

ところで、自然主義者が世界についての考え方の構造を改良するというとき、彼らはいったい何を根拠にして現在の考え方よりも自然主義的な考え方の方がより良いと考えるのだろうか？彼らが根拠にするのは、より少ない道具立てでより多くのものを説明できるような考え方の方が、より優れた考え方であるという一般的なものの考え方である。現象学的存在論は、自然主義的存在論が存在すると認める存在者をすべて存在すると認めるが、その逆は成り立たず、自然主義的存在論は、現象学的存在論が存在すると認めるすべての存在者を存在すると認めるわけではない。つまり、もし自然主義的存在論が世界のすべてを説明することに成功したならば、そのとき自然主義的存在論は、現象学的存在論よりも少ない道具立てで世界のすべてを説明したことになり、よりすぐれた存在論だということになるのである。また、より少ない道具立てで同じ現象を説明しようとしたら、当然ながら、同じ道具立てをより多くの回数使い回さなければならなくなる。このことから、より少ない道具立てで同じ現象を説明することに成功するという事は、その現象の中の必然的な関係により多く気付くことができるということも含意していることが分かるのである。

3. 自然主義的存在論はどこが魅力的なのか？

現代において、自然主義者が自然主義に傾倒し、すべての存在者の存在を時空間的事物の存在と同一視できるようになる日の到来を目指す壮大なプロジェクトに参加する最大の理由は、自然科学の圧倒的成功を目の当

たりにしたからである。

科学の発展の歴史を振り返ると、物理学に還元できない独特の存在があるという主張が、ことごとく裏目に出たことが分かる。万有引力が発見され、物理学が本格的に軌道に乗り始めたとき、当時の化学、すなわち錬金術は、それを物理学に還元するには程遠い状況だった。当時の錬金術では、還元不可能とされた物質の巨視的な性質を組み合わせることによって、新たな巨視的な性質を生み出せると考えられていたのである。この状況が一変したのは、原子論や分子論の登場してからである。そこでは第一次的な性質は分子の性質であり、その分子の微視的な性質が、物質の巨視的な性質の基盤にあると考えられるようになったのである。最終的に分子の微視的な性質も、分子という物体の物理的な性質と同一視されることによって、化学の物理学への還元は完成した。

第二の例は生物学の化学への還元である。生物は、生物だけが有する動物精気や魂のゆえに生きているのではなく、生命活動は、細かく見れば高々有機的分子のメカニカルな運動の巧みな組合せに過ぎないということは、現代の生物学者の共通見解だろう。生物学の化学への還元可能性は、現代の分子生物学の成功が実証している。

科学の発展の特徴は、単にあらゆる存在の物理的存在への還元を推進するだけでなく、その過程で、それまで知られていなかった化学上・生物学上の様々な発見をもたらし、それまで化学や生物学において不思議に思われていた諸問題を解決に導いたという点にある。そこで自然主義者は考える。それならば、長年哲学の中で議論され、解決の糸口がつかめなかった問題も、すべてを物理的存在に還元するという自然科学のプロジェクトに哲学が合流し、意識や思考も物理学に還元できるのだと考えることによって解決することができるのではないか、と。自然主義の動機は、意識や思考に関わる事柄の存在を物理的存在に還元することそれ自体ではない。自然主義者が欲しているのは、そのような還元の過程でもたらされるであろう、意識や思考についての新たな認識なのである。

しかし思うに、自然主義者が時空間に位置づけられ物理的法則に従うことを存在の第一次的な意味と考えることには、大成功を収めてきた自然科学者と存在論において足並みを揃えていれば、きっといいことがあるに違いない、という魂胆だけでは説明がつかない側面がある。というのも、自然主義というのは要するに唯物論なのだが、唯物論的な哲学というのは科学が成功を収めるはるか以前から存在していたし、科学の誕生それ自体が、そのような唯物論的な哲学思想に影響を受けていたと考えられるからである。そこで、自然科学と自然主義哲学の両方を動機付けているより深い動機についても、考察してみたいのである。

ここから述べることは私の一意見であり、自然主義者の共通認識ではないことは予め断っておく。取っ掛かりとなるのは、ロックが第一次性質と第二次性質を区別するのに用いた議論の中に隠れていた。ロックは、直接的な操作の対象となるのは対象の第一次性質だけであり、対象の第二次性質への操作は、対象の第一次性質への操作を介して間接的に可能だけだと述べた。ここで、第一次性質とは物体の大きさや質量、運動などであり、第二次性質とは物体の色や匂いなどである。

指摘しておくべきことは、知覚されることに着目していたのでは、第一次性質と第二次性質の違いは出てこないということである。第一次性質も第二次性質も、見えるし、聞こえるし、触れて感じるができるのである。ある対象が赤いことも、ある対象がしかじかの大きさを持つことも、直接見て取ることができるのである。

ロックはどうして第一次性質と第二次性質を区別したのだろうか？彼は、私たちができることは結局何なのかと考えて、そのような結論に至ったのである。私たちが唯一できること、それは筋肉を動かすことである。高徳の僧侶も、天才数学者も、世紀の文豪も、できることは筋肉を動かすことだけである。私たちは様々な存

在者の様々な性質を経験し、実に様々な抽象的概念を操作するのだが、私たちができるといえば、ただか筋肉を動かすことだけなのである。様々な性質の中で物理的な性質が有している特権性はここにある。それは、筋運動によって直接影響を与えられる性質だという点で、私たちができると直接関わっている点で、特権的なのである。

これが自然主義や自然科学の存在論を動機付けている根拠なのだとするなら、自然主義的存在論と、現象学的存在論は、鮮やかな対比をなしていることになる。現象学的存在論は、意識への現われ、すなわち意識への入力を重視する存在論なのに対し、自然主義的存在論は意識に何ができるか、すなわち意識からの出力を重視する存在論になっているのである。この考え方のもう一つの利点は、それが自然主義的存在論とプラグマティズムを急接近させるということなのだが、その点に関してはまだ私自身十分に究明できていないこともあり、ここでこれ以上取り上げるのは止めておく。

自状しておかなければならないのは、それが無数の哲学パズルを生み出すということが、自然主義的存在論の隠れた魅力になっているということである。前述したように、ごく限られた存在者しか存在していると認めない自然主義的存在論は、それに対する反例に見える事例に数多く直面することになる。問題となる存在者とは、先ほども挙げたように、数、概念、可能性、規範性、目的、意識、志向性、クオリア、理念、意味といった存在者である。もちろん、これで全部だというつもりは毛頭ない。自然主義のプログラムは、これらの存在者を物理的な存在者に還元するかあるいは実は存在しないのだとして消去することを目指す、という膨大な量の哲学パズルを、したがって哲学研究者の飯のタネを、創出しているわけである。

現代の自然主義は、フッサールの批判の的となった100年前の自然主義と大差はないのかもしれない。100年前の自然主義に関して調べる余裕がなかったので、正確なことは言えない。だが、確実に存在するといえる両者の大きな違いは、フッサールの批判から学んだ現代の自然主義が、志向性の問題が一筋縄ではいかず、それを解決（還元）すれば他の多くの問題も同時に解決するという意味で鍵となる問題であるということを確認しているという点である。自然主義の立場から、志向性に関して大きな著作がいくつか出版されている。ジョン・サールの『志向性』、ダニエル・デネットの『「志向姿勢」の哲学』などがそれである。

最後に繰り返しておきたいことは、自然主義というのは一つの完成された主張なのではなく、ある方向で哲学的諸問題を解決していこうとする壮大なプロジェクトに付けられたプロジェクト名だということである。そしてそれは、現在も解決のめどがつかない無数のパズルを孕んだ、「未完のプロジェクト」だということである。